千葉商大論叢　第 56 巻　第 3 号（2019 年 3 月）pp. 123-140

〔論　説〕

産業革命期ランカシャー州プレストンと資本家
―「ロンドン・タイムズ」にみる「ホロックス家」―

大　賀　紀代子

はじめに

18 世紀後半から 19 世紀前半にかけ，イギリスでは経済活動の劇的な変化が生じた。それまで「手作業」を基本として作られていた商品が，主に「機械」によって生産されるようになった。機械の購入を可能にするための資本が必要となり，機械を一か所に集め生産を行う「工場」という経営形態が誕生する。それまでの「手作業」を中心とする生産では家庭内や小さな作業場での作業が主であり，人々は日々生活を行う空間と仕事を行う空間との間に大きな隔たりがあるわけではなかった。しかし，「工場」という仕事を中心とする「場」が誕生したことで，生活の場と仕事の場が異なることとなった。人々は「工場」に出向き，一定の決められた時間，監督官の監視の下で「機械」とともに仕事をすることになった。「ものづくり」の方法が変化したことにより，労働スタイルが変化したのである。経済活動の変化が結果的に生活を変化させていった。

この変化は，新しいタイプの「労働」を生み出した。いわゆる「工場ではたらく賃労働」である。「工場」という経営形態の出現以前は，問屋制の下，家族ぐるみで一定の稼得が得られるというしくみであった。しかし，「工場」での就労は，工場主である資本家に雇用されることで，男女問わず，個人ごとにその技能や労働に応じた「賃金」が支払われるしくみに代わっていった。つまり，個々人が独立した独りの「労働者」として雇用され，その個人のもつ技能により与えられる仕事が異なっていたのである。そして雇用主により会社の経営状況等に応じて，雇用されるか解雇されるかが決められた(1)。

このように，多くの人々が「会社」で雇用され，各個人の技能や労働時間により異なった報酬つまり「賃金」を得ることができる労働環境が 18 世紀後半から 19 世紀前半のイギリス，とくにイングランドで誕生した。イギリス産業革命である。

このイギリス産業革命には，多くの発明が必要であった。生産様式を大きく変化させた機械の発明である。

機械の発明自体は，18 世紀以前より行われていた。例えば，16 世紀末にはウィリアム・リーによって「靴下編機」が発明され実用化されていた。また，イングランド東部ノーフォー

(1)　琴野孝『イギリス産業革命研究』早稲田大学出版部，1965.：カール・マルクス（向坂逸郎訳）『資本論Ⅰ』，岩波書店，1969.：吉岡昭彦編『イギリス資本主義の確立』御茶ノ水書房，1968.：武居良明『産業革命と小経営の終焉』未来社，1971.：中川敬一郎『イギリス経営史』東京大学出版会，1986.：大塚久雄『欧州経済史』岩波書店，2001. 等の 1960 年代，70 年代に展開された産業革命研究をはじめ，多くの産業革命研究で論じられてきた。

ク州のノリッチ（Norwich）では，1700年代初めには紡績機械が誕生していたと考えられている。そして，両者とも繊維業に関わるものであった。つまり，繊維業において，機械の発明は産業革命以前から顕著であったと思われる。そして，この織物業における機械の発明は，1733年ジョン・ケイによって「飛杼」が発明されたことによりその重要性を増すこととなる。繊維製品は，主に「糸」を生産する工程である「紡績」と，その糸を使って布を生産する「織布」の工程に分けられる。そして，できあがった布を使って，洋服をはじめさまざまな繊維製品へと変化させていく。織工であった彼が発明した「飛杼」は，布を織る「織布」に大きな変化をもたらした。「飛杼」の導入により，生産の速度は速くなり，生産量は倍増していった。その結果，布の生産が著しく増加し，生産に必要な糸が不足することとなった。そこで，1760年代にジェームス・ハーグリーブスにより「ジェニー紡績機」が，リチャード・アークライトによって水力紡績機が発明されることとなった。つまり，糸の生産においても機械化は進展し，大量の生産が可能となったのである(2)。

このように，機械化は産業に劇的な変化をもたらした。初めはとある工程の部分的な機械化であり，それが生産スピードのアップによる生産量の拡大をもたらし，最終的には工程にかかわる作業の多くを機械化するほどになった。

産業革命期における機械化は，もちろん人々が携わる仕事の内容にも大きな変化をもたらした。それまで手作業でおこなわれていた作業が機械にとってかわられることで，古くから存在する伝統的な手法を用いる必要がなくなったと，従来の産業革命研究では考えられてきた。この典型が，「手織（handloom weaving）」であった。「手織」は文字通りの手機を使い手作業で布を織る生産方法である。これに従事していた人々を「手織工（handloom weaver）」と呼ぶ。「手織工」は，古くは特別な技能を持つ人として地域の政府関連の仕事に関わることもあった(3)。そのため産業革命以前においては，「手織」の技術は一部の人が保有する貴重なものであった。その技能は徒弟制によって大切に守られ伝承されていった。しかし，19世紀にはいり，様相は一変する。つまり，「手織」が「機械化」していったのである。その結果，「手織工」は姿を消したとされてきた(4)。

しかしながら，古くからの「手織」の技能を継承し，市場の求める「高級な布」の生産に重点をおくことで，産業革命後も「手織」を1つの産業として存続させていた地域があった。イングランド北西部のランカシャー州の一都市プレストン（Preston）である。プレストンでは産業革命期において綿業が主要産業とされていた。プレストンにはたくさんの紡績工場や織布工場が立ち並び，当時のイギリスの綿業の中心地の一つであった。この地域に綿業をもたらし，イギリスにおける綿業の牽引する産業都市にしたのが，「ホロックス家（Horrockses）」であった。「ホロックス家」の尽力により，プレストンでは綿業における工場での生産と「手織」による生産という，2つの生産形態が，生産する製品を異にすることで見事に混在し続けた(5)。機械生産が進展し，工業化社会が成立していくなかで，一体，なぜここのような仕組みをつくりあげることが可能であったのであろうか。そして，なぜ，このよう仕組みをつくることを必要としたのであろうか。

---

(2)　大塚『欧州経済史』2001，204-205．をはじめ，多くのイギリス産業革命研究および綿業研究において共通の理解とされている。

(3)　*Report from the Royal Commission on Hand-Loom Weavers, Pt. II* 1840, 216.

この大きな疑問を解決すべく，本稿ではその一端として，「ホロックス家」について，当時の資料の分析を通じその実態をみていきたいと思う。

1. イギリス産業革命における綿業の位置づけ

「ホロックス家」について考察していくにあたり，イギリス産業革命と綿業の関係を確認しておきたい。

イギリス産業革命の研究は，現在，さまざまな視点から展開されている。人口変動・賃金・農業・金融・投資・家計・都市化・生活水準・消費・需要・教育・ファッションなどの文化・貿易・技術革新などである。しかしこれらの考察においても，基本的に綿業は産業革命の完了とともに機械化が進展し，伝統的な生産は消滅していったととらえられてきた(6)。

そもそも産業革命期における経済成長は，従来，「急激」であったと考えられきた。1960年代から1970年代にかけて，ディーン・コールらの研究に代表されるように，機械化による大量生産により経済が急激に活性化していったのである。そして，それを牽引していったのは国民的な産業であった綿業であった(7)。先に述べたように，「飛杼」にはじまる一連の技術革新は，機械を生み出し，生産方法を変化させ，その結果綿業における大量生産を可能としたのであった。機械化による劇的な生産方法の変化が，急激な経済成長

---

(4) 産業革命期の手織工についてS・D・チャップマンはその著書『産業革命のなかの綿工業』（佐村明知訳）の中で次のように述べている。「すくなくとも1830年代半ばまでは、家内工業従事者数が工場労働者数を上回っていたことは明らかである。手織工たちは，ランカシャー州のほぼ全域と，チェシャ州やダービィシャ州のランカシャーとの隣接地帯，それにグラスゴーからベイリーにいたるウェスト・ライディング地域などを覆うほど，広く分散していた。こうした広範な分散はかえって，手織工たちが自分自身の生活水準を守るべく団結するのに障害となった。しかも，手織工たちが力織機に対する降伏になかなか応じようとせず，力織機への転換に時間がかかったことは，手織工たち自身を貧困の淵に追いやり，社会史上，最も悲惨な一章を生み出すことにつながった。こうした手織工にまつわる悲哀の情念は，当然なことに，多くの書き手を引きつけた。同時に，手織工の貧困に絡む問題についても，様々に異なる解釈が提示されたのであった。だが，そこでの手織工の生活状況に関する議論に参加し，何らかの貢献をした人たちの解釈には，しばしば政治的な色合いが添えられることもなくはなかった。」S.D. Chapman, *The cotton industry in the industrial revolution*, Basingstoke: Macmillian Education, 1972, 61.: S.D. チャップマン（佐村明知）『産業革命のなかの綿工場』晃洋書房，1990, 88-89. このように，手織工が機械に容易にとって代わられることで，「手織工の低賃金化」が進み「手織」という仕事が消滅したと考えられてきた。「手織工の低賃金化」は，手織工の生活を貧困化させたと理解されてきた。例：マルクス『資本論Ⅰ』1969，75. 大塚『欧州経済史』2001，等　この視点は従来より産業革命期イギリス（主にランカシャー州）の木綿手織工に焦点をあて考察した研究でも，同様の見解が示されてきた。Bythell, *The handloom weavers: a study in the English cotton industry during the industrial revolution,* Cambridge: Cambridge University Press, 1969.: G. Timmin, *The last shift: the decline of hand loom weaving in nineteenth-century Lancashire,* Manchester: Manchester University Press, 1996.

(5) 大賀紀代子『イギリス産業革命期ランカシャー州プレストンにおける綿織物業の経営形態―「手織物工場 handloom factory」に関する一考察―』大阪大学大学院経済研究科博士論文，2014.

(6) R. Floud and P. Johnson, eds., *Cambridge economic history of modern Britain, vol. 1,* Cambridge: Cambridge University, Press, 2004. を参照されたい。

(7) P. Deane and W.A. Cole, *British Economic Growth 1688-1959,* Cambridge: Cambridge University Press, 1960.

を導いたという需要サイドの要因により，この劇的な変化は生じたと考えられた。このような見方に対し，1980年代には，ニック・クラフツらによる「穏やかな経済成長」が主張されるようになった[8]。この「穏やかな経済成長」をもたらした要因として，パトリック・ハドソンは「産業革命期を通じて，小さな仕事場での労働がなお存続し続け，工場での生産に完全に移行することはなかった。そのため，徐々に工場制への移行が進んだため，結果的に穏やかな経済成長となった」と考えた[9]。つまり，小さな仕事場での労働が産業革命の進展のなかで存続し，すべてが産業革命の期間に工場での生産に移り変わっていったわけではないということである。

この「穏やかな経済成長」の枠組みの中で，その要因を探る研究が展開されてきた。そして，綿業における工場での生産への移行は，機械化の影響の大きさがいかなるものであったかという観点から論じられることが多かった。

ロバート・C・アレンは，「産業革命とは何か？」といった問いに対し，「その本質的な特徴は，技術革新である」と述べている。アレンは，高賃金で安価なエネルギー環境が産業革命の背景にあったとし，この環境がいかにして産業革命を引き起こしたのか，という視点から産業革命を分析している[10]。先に述べたように，「ジェニー紡績機」や水力紡績機の発明は綿業における生産の機械化に大きな影響を与えた。アレンは，産業革命期の発明をマクロレベルの発明とミクロレベルの発明に分け論じている。「ジェニー紡績機」はマクロレベルの発明として捉えられる。なぜなら，技術進歩の長い軌跡を導くきっかけとなり，結果的に生産性の大きな上昇に結びついたからであった。

つまり，「技術革新」こそ，綿業という産業を大きく飛躍させた要因であると考えられてきた。

ところで，この「技術革新」により導入された機械による生産は，「工場」という経営形態とどのようにリンクしていったのであろうか。

例えば「ジェニー紡績機」の場合，もともと比較的小規模なマニュファクチュアや家内工業のなかに普及していき，改良に伴い大規模化していき最終的に「工場」という姿をとるようになったと考えられてきた。一方，「水力紡績機」は，一挙に大規模工場を生み出したと考えられている。つまり「工場」での生産は糸をつくる過程である紡績ではじまったのである。しかし，先に述べたように布をつくる織布の工程は手織工による手作業での伝統的な生産方式であったため，糸の生産力と布の生産力に大きな隔たりが生じてしまった。そのため，織布工程の機械化の必要性が生じたと考えられてきた。イングランドの綿業において，織布工程の機械化は，1785年エドモンド・カートライトによって発明された「力織機」の誕生によって開始する[11]。

しかし，イングランド綿業において，織布工程が，いかにして手織工による伝統的な生

---

(8) N.F.R. Crafts, *British Economic Growth during the Industrial Revolution,* Oxford: Oxford University Press, 1985.

(9) P. Hudson, *The Industrial Revolution*, London: Edward Arnold Limited, 1992.: パット・ハドソン（大倉正雄訳）『産業革命』未來社，1999.

(10) R.C. Allen, *The British Industrial Revolution in Global Perspective,* Cambridge: Cambridge University Press, 2009, 135.: R.C. アレン（眞嶋史叙・中野忠・安本稔・湯沢威訳）『世界史のなかの産業革命：資源・人的資本・グローバル経済』名古屋大学出版会，2017，152.

産方式から工場での「力織機」を用いた生産形態へと変化していったのかを明らかにする必要性はいまだ存在する。なぜなら，中川敬一郎は『イギリス経営史』のなかで，「織布工場そのものの成立過程について充分な史料に基づく考察の必要性」を訴えている(12)。手織工による伝統的な生産から工場での生産を開始するに至る経緯が，不明瞭であるということである。中川は，織布工程の発展過程を主に4つの段階で示した。独立織布工が存在し，問屋制織布業がその後誕生する。そして力織機が普及したことで紡織兼営大工場が誕生し，結果的に紡・織専大工業へと移行すると考えた。そして，この各過程の移行が，どのようになされたのか，具体的な事例に基づく研究がなされていないと指摘している(13)。

つまり，「型破りな部門である綿業」による生産形態の変化が，どのようにして経営形態の変化をもたらしたのか，といった点における具体的な事例をいままでの研究ではあまり分析してこなかったのである(14)。

イギリス産業革命期における綿業は，言わずもがな，ランカシャー州で主に発展した。ランカシャー州マンチェスターでは，多くの紡績工場が誕生した。同じランカシャー州のプレストンおよび同州ボルトン（Bolton）には，紡績工場や力織機をも用いた織布工場も多々存在したが，一方で伝統的な技能である手織工による織布がさかんに行われていたのであった(15)。

遡ると，イングランドにおいて，17世紀ごろから綿糸の原料となる綿花は，そのほとんどが一旦ロンドンに集められ，その後ロンドンを経由してマンチェスターに送られるという構造が成立していた。もともと明るい色調のデザインの捺染ファスチャンの染色技術もロンドンの地場織物工業で培われた伝統的な技能であった。つまりロンドンにおいて産業革命以前より古くから織物産業が展開されていたのである。この伝統的な技能は，その後ランカシャー州などのイングランド北西部に伝えられ，結果的にランカシャー州のキャラコ捺染工業の基礎を作るに至ったとＳ・Ｄ・チャップマンは述べている(16)。そして，

---

(11) Chapman, *The cotton industry,* 1972, 24-25.: チャップマン『産業革命のなかの』，1990, 30-31. をはじめイギリス産業革命に関する多くの研究では，周知の事とされている。

(12) 中川は，以下のように述べている。「当時この手織工の窮状については幾度か調査が試みられ，その後イギリス綿業史家達もそれらの調査報告書を史料にして，手織工の没落過程に繰返し論及している。しかし，その割には手織工の経営形態の詳細は明らかではなく，まして，織布工場そのものの成立過程については殆ど触れられていない。（中略）一方における巨大紡績工場と他方における分散的織布工との間には，何らかの問屋制度的機能が存在したにちがいないという推定にもとづき，従来の諸研究のいわば語るに落ちたところを拾い集めてみた結果が本節に記したごとき内容になった。したがって，本節の叙述は，未だ一つの素描たるにとどまり，充分な史料による肉付けは他日の課題に残されている。例えば最後に述べた紡・織両工程の一貫経営についても，それまでにのべた問屋制度とこうした新しい織布工場との間の関連は充分これを明らかにすることができなかった。」中川『イギリス経営史』1986，42.

(13) 中川『イギリス経営史』1986，66-67.

(14) ハドソンによると，「クラフツは、工業経済が依然として伝統的な部門と後進的な生産方法によって支配されていたとみなした。そうして，製造業全体における生産性の型破りの部門―木綿―によって，引き起こされたものであったと主張した」と捉えている。Hudson, *The Industrial Revolution*, 1992, 39.: ハドソン『産業革命』1999, 61.

(15) Bythell, *The handloom weavers*, 1969, 29.

(16) Chapman, *The cotton industry* , 1972, 12.: チャップマン『産業革命のなかの』，1990，3 この技術がランカシャー州に持ち込まれたのは，同著より17世紀頃と推測される。

ランカシャー州はファスチャン織を製造し，そして出来上がった布地をロンドンに送っていた。その後それらの布地はロンドンにおいて漂白・染色され海外に販売されていったのである。この仕組みは，ランカシャー州の家内工業によって支えられていた。このランカシャー州の家内工業には，元締めが存在したとされている。そして彼らはマンチェスターやボルトンの企業家達であり，ロンドンと取引関係を持っていたと考えられている。つまり，産業革命期において綿工場が建てられてた地域には，17世紀ごろからすでに家内工業での生産を取りまとめる資本家が存在していたということである。そのため，産業革命期において織布業が盛んであったランカシャー州プレストンにおいても，同様の実態が考えられよう。さらにチャップマンは，ランカシャー州の綿業の特色について以下の点に着目している。

ランカシャー地域においては，最初の水力紡績工場が登場する約2世紀間にすでに資本家階級や熟練労働者の形成と展開がみられた[17]*。*

つまり，ランカシャー州は，産業革命以前の段階より，資本家というものが存在し，古くからの技能を用い手作業での生産が行われていたということである。

一方，19世紀後半から20世紀前半を対象としイギリス綿業の衰退について考察した日高千景は，19世紀末のランカシャー州綿業における構造について，以下のように述べている。

綿紡績部門は主としてランカシャー南部に集中し，さらにその中で細糸・極細糸はボルトンおよびその周辺に，縫い糸用の細糸はマンチェスター近郊に，そしてアメリカ産の棉花を使用する中・太糸はオルダムおよびその周辺にそれぞれ集中して発達した。他方，織布部門はブラックバーン，バーンリー，プレストンなどを中心都市としつつ，ランカシャー北部に集中した[18]*。*

すなわち19世紀末になるとランカシャー州は北部と南部で役割を分担する形で綿業を構成するようになっていた[19]。工程別・製品別に棲み分けが進むこととなった。

17世紀から資本家のもとロンドンの伝統的な技能を受け継ぎ手作業による生産をはじめていたランカシャー州は，産業革命期を経て，結果的に都市ごとに工程・製品を分けることで産業を存続させた。専業化の進展である。

この専業化は1880年代に入り急速に進んだ。北部地域での力織機を用いた織布の専業企業の増加であった。この専業企業の増加は，それまでに存在していた紡績・織布結合経営型企業の衰退をもたらした。産業革命期を通じて，ランカシャー州では紡績工程と織布工程が一体となった紡織一貫が多数誕生した。もちろんプレストンにも存在した。この紡織一貫工場は，19世紀前半までの市場が安定していない時期においては紡績または織布

(17) Chapman, *The cotton industry*, 1972.: チャップマン（佐村明知）『産業革命のなかの』1990, 6-7.
(18) 日高千景『英国綿業衰退の構図』東京大学出版会，1995，60-61.
(19) ビィゼルも北部と南部の違いを指摘している。Bythell, *The handloom weavers*, 1969, 7.

の需要の偏りを調整できる有効な経営形態であった。しかし，19 世紀後半にはいり，アジア市場における粗綿布需要の急増により需要が安定した結果，生産規模の拡大に伴う工程間の調整負担の増大から専業企業へと移行することとなったのである。すなわち，需要の変化が専業化を押し進めたのである[20]。

こうしてランカシャー州の綿業はその生産形態・経営形態を，17 世紀の様式から 19 世紀に見合ったものへと変化させてきた。手織のみであった生産に対し，機械化がおきたのである。そして，家内生産や問屋制下での生産であったものが，紡績工場・織布工場での生産へ移行し，その後紡織一貫の工場へ発展する。最終的には専業企業の成立をもたらすに至ったのである。

この生産形態・経営形態の変遷は，各都市の資本家により牽引された[21]。マンチェスター・ボルトン・プレストンなどの各都市はそれぞれ紡績もしくは織布の伝統をもち，資本家によってより大きな産業へと進化していった。各都市の資本家の綿業に対する働きが，綿業の生産形態・経営形態の変化と深くかかわっているのであれば，中川が投げかけた「手織工により伝統的な生産が工場での生産を開始するに至る経緯はどのようなものであったのか」という問題を解くにあたり，産業革命期の特定の都市における資本家をあげ，彼らの動きを探ることが必要となるのではないだろうか。彼らがどのような形で綿業に関与し，その拡大に寄与していたのであろうか。その実態を探る一例として，本稿ではランカシャー州プレストンの資本家であった「ホロックス家」に着目したのである。

2. プレストンとホロックス～「ロンドン・タイムズ」から紐解く～

先に述べたように，プレストンは古くから「手織」の伝統が根付いていた。その技能を用いて，多くの手織工たちが織物業で活躍していた。産業革命という「ものづくり」の変化を通じ，経済が変化していった。それに伴い人々の生活や働き方も大きく変化していった。社会が様相を変えていったのである。

この時代の流れのなかで，「手織」の伝統が根付き多くの手織工がいたプレストンは産業革命に対し大きな役割を果たすこととなった。

プレストンは，イングランドの北西部に位置する。産業革命が終わりにさしかかった 1841 年には人口約 5 万人の都市であった[22]。21 世紀にはいり人口は約 14 万人（2017 年

(20) 日高『英国綿業衰退の』1955, 57-59.

(21) 日高は『英国綿業衰退の』において，ランカシャー州オルダム（Oldham）およびその周辺についての考察を行った。オルダムはアメリカ棉紡績部門の中心都市であり紡績を専業に営む株式会社が多数存在した地域であった。産業革命期のオルダムでは，プラット・ブラザーズ社（Platt Bros. & Co）によって自動ミュール（self-acting mule）が開発された。1863 年には株式会社形態である紡績工場サン・ミル（Sun Mill）が操業を開始し，大規模紡績経営の優位性を示した。オルダムでは協同組合運動の盛んであり，協同生産組合は企業の資本調達に深く関与した。日高『英国綿業衰退の』1955，19-20. 前掲，D.A. Farnie, 'The Structure of the British Cotton Industry 1846-1914', in A. Okochi and S. Yonekawa (eds), *The Textile Industry and its Business Climate-The Inyernational Conference on Business History 8*, Tokyo: University of Tokyo Press, 1982, 60-69.

(22) 1841 年人口センサス個票を用いた筆者による計数。National Archives, HO 107/498 and 499

上半期時点）にまでに拡大している[23]。プレストンは産業革命期の綿紡績業の中心地であったマンチェスターとは比較的近い距離にあり，マンチェスターの北西に位置する。現在では鉄道で約50分ほどである。

もともとプレストンでは，チューダー朝時代に繊維業が本格的に広まったとされる。プレストンには12世紀の後半に，すでにギルド（Guild Merchant）が存在しており[24]，16世紀にはプレストンにおけるギルド商人の重要性は増す一方であった。その頃はまだイギリスで綿業が開始されていなかったため，主な製品はウール・亜麻・リネンで作られていた。それらが盛んに取引をされていた様子が当時の資料からうかがえる[25]。

この繊維業の伝統があるプレストンに，綿業が入ってきたのが18世紀後半のことであった。産業革命期，プレストンの手織工は町の中心部に近い場所で問屋制の下，仕事を請け負っていた。綿織物が作り出す需要に答えるがごとく，プレストンでは紡績業をも確立させていったのである。その発展は，繊維業そのものの発展へとつながっていく。その動きはまず1771年にリチャード・アークライトの発明として表れた。水力紡績機を発明した彼はプレストンの出身者であった。彼の祖先たちは，約200年前の1562年に，すでにプレストンギルド（1562 Preston Guild）に所属していた。その後1775年に誕生した彼の息子もプレストンで生活をしていた。つまり，プレストンが何百年もの間培ってきた繊維業の伝統が，産業革命を導き出したと言えよう。

1777年，William Collisonによってプレストンにおける初めての紡績工場が建設された。この紡績工場は，当時のプレストンの行政長であったRalph Watsonが，自らが所有するプレストンの中心部から遠くはなれた土地に建設したものであった。つまり，紡績工場は，行政と深くむすびいていたことがうかがえる。この事実は，当時のプレストンにおいて繊維業というものを，地域を牽引する産業として位置づけていたことの表れとして捉えられよう。このような風潮は，プレストンを産業革命の中心地として発展させた一因であり，その後産業革命期を通じて受け継がれていったと考えられる。

このように，プレストンがもつ中世より受け継いできた伝統と繊維業の発展が相まって，地域をあげた一大産業として成立していった。この結果，先に述べたように産業革命を通じて，プレストンはランカシャー州における綿業の中心都市となり，またイギリスの工業化を牽引する都市となっていった。

このプレストンにおける綿業を中心とする工業化は，既述のように「ホロックス家」によってもたらされたとされる。プレストンにおける「ホロックス家」の活躍は，イギリスの公的な文書である「英国議会資料 British Parliamentary Papers」からも確認される[26]。

---

(23) ランカシャー州議会ホームページより www.lancashire.gov.uk（参照日時：2019年1月19日）

(24) 古くからプレストンではギルドに登録されるのに数週間以上の日数を要していた。しかし，取引が盛んになるにつれて，日数に関する問題等もあり，ギルドに関する法令を変更する必要が生まれた。そして，19世紀にはいり，自由貿易の影響による綿業の目まぐるしい発展のなかで，プレストンにおけるギルドはその在り方を変えていったとされている。: D. Hunt, *The Wharncliff Companion to Preston*, Barnsley: Wharncliff Books, 2005, 63.

(25) Hunt, *The Wharncliff Companion to Preston*, 2005, 65.

(26) *Report from the Royal Commission on Hand-Loom Weavers, Pt. V.* 1840, 600. において，とても大きな製造業者であるとホロックス家が経営する工場を形容している。

「英国議会資料」とは，公文書の一種であり，英国議会が論議の対象とする議題について，あらかじめ調査することを目的とし，作成されたものである[27]。つまり，綿業をテーマにイギリスの19世紀の工業化の実態を調査した結果，ランカシャー州のプレストンが工業化の中心地として挙げられ，そこでは「ホロックス家」が綿業の発展に大きく寄与していた様子がうかがえたのである。すなわち，19世紀のイギリス全土を調査した結果，綿業において，それを牽引していた資本家の一人が，「ホロックス家」であったということを示している。

「ホロックス家」は，日本で展開されてきたイギリス経済史研究ではあまり着目されることはなかった。僅かながらの記述にとどまっている[28]。

そこで，資本家としての「ホロックス家」がプレストンという都市に対し，そして当時の綿業に対し，どのような存在であったのであろうか。

以下は，イギリスの日刊新聞である『タイムズ Times』（1913年6月27日付け）に掲載されたHorrockses・Crewdson株式会社（Horrockes, Crewdson, and Co., Ltd.）に関する[29]記述である。

とても厳しい状況を乗り越えたこの会社の歴史は，おとぎ話のように子供や大人に夢やロマンを与えるであろう。成功と不滅の歴史である。「むかしむかし勇敢で頭のいいジョン・ホロックスという少年がボルトンの近くのEdgworthと呼ばれる場所に両親と住んでいた。ジョンの父親は採石場を経営しており，彼は父親の手伝いで石臼を販売していた。この暮らしのなかで，ある日ジョンは，『旅にでて金持ちになり父や母を助けたい』と思うようになった。両親の同意を得て，丈夫な棍棒を持ち，勇敢な心とともに，『さよなら』を言い彼は旅立った。別れ際にジョンは，『巨人』を退治した後（意訳：苦難にも負けず），いつの日か沢山の金をもって必ず戻ってくると両親に約束した。とてもとても長い道のりのなかで彼はひどく疲れ足はひび割れた。しかし，彼は笑顔を絶やすことなく歌を口ずさみながら力強く歩き，ついにプレストンと呼ばれる場所についた。そこで彼は『巨人』に遭遇した（意訳：苦難にあった）。着いた当初，偏見を持つ者により彼はそのひび割れた足に石を投げつけられた。次に，資金面での苦難がやってきた。ジョンに一銭も貸してくれる人はいなかった。そのうえジョンを叩き潰そうと，『多額の金銭と新しいシルクのドレスが用意できなければ即死刑に処する』とまで言われた。このような苦難の渦中においても，彼は父・母・兄弟・姉妹を決して忘れることはなかった。そして，さまざまな苦難に打ち勝ち，多額の金を手に入れ，プレストンを自らの王国とし『家』と呼べるこの美しい場所で父・母・兄弟・姉妹とともに暮らした。プレストンのすべての人々およびジョンの父・母・兄弟・姉妹は，彼を愛し，そして皆幸せに暮らした。しかし，プレストンで一番の幸せ者は，巨人を倒し（意訳：苦難に打ち勝ち）自らの王国を築き上げたジョンであっ

(27) 詳しくは丸善株式会社編『英国19世紀“ブルー・ブック”研究の手引』丸善，1973. を参照されたい。

(28) 鈴木良隆『経営史―イギリス産業革命と企業者活動』同文舘出版，1982. などにおいて，産業革命期の企業として僅かながら登場している。

(29) “*The Times*”, 27 June 1913, 16. 51. *The Times Digital Archive.*

た。」とても魅力的で人々を引き付けるこの物語は，事実である。さまざまな困難に立ち向かう際，彼の武器になったのは，彼の持つ頑固さと誠実さであった。彼は，会社が危機に陥り不安定になった時には迅速に決断を下し，どんな時もビジネスに対して献身的であり，自社の製品の品質には細心の注意を払っていた。ジョンと彼の会社の商品は，まったく非の打ちどころがなかった。

（中略）

18か月後，この勇敢な工業分野における武者修行者は，ついにRichard Newsham氏に資金援助をしてもらえることとなった。Newsham氏は，新星のごとく登場し，建物群の中心にそびえたつ有名なYellow Factoryを創立した若干23歳のこの若者を信用したのである。糸を紡ぐ工程は手作業で行われたが，一方で梳棉機を動かす動力として馬力が使われた。しかし戦略として当時政治的な権力者であったスタンリー一族と連帯を組むことで，ジョン・ホロックスは1802年に下院議会の一員に選出された。政治的に敵対する相手（意訳：スタンリー一族）は貴族の出身であり洗練されてはいるが，不愛想な人物であった。この敵対する相手と手を組むというとても奇妙な戦略ではあったが，世間はジョンを自分たちのよき息子としてとらえた。その理由は彼の力強さと人々を引き付ける魅力にあふれた人間性によるものであった。中には，政界進出は彼の人間性のみによるものだとさえという人もいた。

ジョン・ホロックスは，1804年11月1日，36歳という若さで死去した。彼の死は，社会的大きな影響を及ぼした。13年前，彼は無一文でプレストンにやってきた。しかし，亡くなった時には，15万ポンドという大金を遺産として残した。それだけなく，誠実さと高潔さを併せ持った彼の人柄は，プレストン市民にとって口碑となった。ジョン・ホロックスのような人物の人生はとても注目されるものであったが，それは彼の健全な行動，適格な批判，柔らかい物腰に表れていた。彼はとても男らしい人物であり，いざというときには「ナツメグのおろし金」のような荒々しい行動をとることもできた人物であった。その結果，案の定，彼はビジネスにおいて成功をおさめることができたのである。時間に対する几帳面な点は彼の強みのひとつであった。例えばプレストンの事務官であったPalmer氏が遅刻をした際，ジョンのみせた対応はいまでも称賛されている。Penwortham Bridgeの委員との会議のため朝10時に召集がかかった際，Palmer氏は遅刻をして10時30分に会議室に到着した。こののろまな人物を，ジョンは厳格な面持ちで静かに待っていた。

「Palmer，君は時計を持っているかい？」とジョンは愛想のない挨拶をした。

「もちろん，性能のいい時計をもっているよ」とPalmerは答えた。

「見せようか？」（Palmer）

「では，今何時だ？」（ジョン）

「10時30分だ。」とPalmerは答えた。

「そのとおりだ。しかしこの会議は10時開始の約束だった。しかし，君は30分前の10時にはここにはいなかったよな。上司がどうであろうと仕える者は時間に正確でないといけないことを覚えとけ。」（ジョン）

Palmer 氏に対するジョンの譴責はその後彼を大きく変えた。Palmer 氏は時間に対する正確さに関しては模範的な人物となったのである。Palmer 氏を待っている間，ジョンの不愛想な様を見て，彼の議員仲間は笑っていた。このような彼のしっかりとした性格はピットの目にとまった。そして，ジョンは議会での発言に向け精力的に活動し，すべてのことにきちんと準備をした。彼が Woolwich を訪れた際，繭を手で紡ぐ様子を目にした。「私が目にしたのは」とジョンは語調を強めた。「手で繭を紡ぐ風景であった。手ではなく，機械を使うべきだ。私はこの事実をピットに伝えなければならないと感じた。」ジョンの言う通りだった。その後，機械はすぐに用いられるようになった。優れた人格者であったジョンの証言は，プレストンにおいて証券に関する仕事をしていた Crane 氏の働きかけによって，証言として採用されるに至った。創業まもない製造業者の資金に対し，Crane 氏は不安を抱いていた。自らを安心させるために，Turk's Head-yard に足を踏み入れ，あたりを見回した。そのとき，彼はジョン・ホロックスが議場で真剣に働きかけを行っている姿を目にした。これだけで十分だった。このような Crane 氏の精力的な活動は，その後，Crane 氏のホロックスに対する資金援助へとつながっていく。

ジョン・ホロックスの成功の裏には彼の兄弟であるサミュエルの手助けがあった。彼はその性格から「沈黙のプレストン人」と呼ばれていた。ある日，突然，下院が興奮に包まれた。沈黙のプレストン人がついに下院に提言をしたのであった。彼の雄弁さは，その後語り継がれた。特に選挙の時は雄弁な人物であることが一段と評価された。彼の息子がギルド長を務めていた 1842 年 3 月，彼は他界した。ジョンほどの才能や偉業はないが，聡明さにより彼は成功した。ジョン・ホロックスの信念はその後会社にかかわる人々により受け継がれ，今なお大いなる成功を生み出しているのである。

プレストンはいつも誇りと貴族的な雰囲気で満たされている。昔も今もまったく変わらない。昔の香り，古くから続く伝統，功績，信念が感じられる。面白いことに他の地域は変わってしまった。Farington country を越え，Ribble に沿って作られた庭園から南方をみると，貴族の時代からの古い町並みに気づく。しかしこのような町は，崩壊を免れることはできないであろう。新しい価値観をもった人物が表れ，いままでの考えをかき乱し，受け継がれてきた地域の「かたち」を破壊し，悪巧みをするものを一掃した，ということに，強い羨望を抱くことになろう。このような町は，労働力を組織化するというジョン・ホロックスの考えに批判的である。これは決して容認されることではない。このような町にいる人々は，自らが生活する古いコテージを去るべきである。手作業で糸を紡ぐことや，手作業で布を織ることは合理的ではない。ジョン・ホロックスの工場に来るべきである。取引の点でも問題が見受けられる。プレストンでは取引に関して道理にかなっていれば自由にできるが，しかしそのような町ではそうはいかない。そのような町の問題は，ジョン・ホロックスの人柄によって解決されよう。ジョン・ホロックスの人柄と情熱によって，プレストンの人々がすばらしい方向に向かっていくことができたように，彼らの問題は霧が晴れたように解決するであろう。1807 年，ホロックス社（Horrocks and Co.）は 5 人の徒弟をかかえ，活気あふれるすばらしい組織であった。

（中略）

1860年，William Bowman氏の退職によりAlderman Thomas Miller氏はホロックス・ミラー社（Horrockses, Miller, and Co.）の事業の唯一の所有者となった。しかし彼はその立場を十分の活かすことなく1865年に死去した。その後，Edward Herman氏がロンドン本社のトップに就任し，1861年の元旦にはパートナーとなりこの巨大な成長著しい企業の支配者となった。

ジョン・ホロックスのように，Hermon氏は会社によってすばらしいトップとなった。工場での職務経験はないにもかかわらず，うまく業務をこなした。そして，彼の情熱と能力は町の人々の尊敬を集めるに至った。彼は政界にも進出し，1868年には選挙の結果プレストの保守党の一派に所属した。彼は下院議会の後，自宅があるBerkely区において1881年5月6日，脳卒中のため亡くなった。その後，Hermon氏の甥たちとともにフレデリック・スタイル氏がパートナーになった。甥であるS. Outram氏とS.A.Hermon氏も順調に仕事をこなした。そして1885年，ビジネスのより拡大のために，パートナーシップよりも効果的な新しい秘策を打ち出した。新しい秘策とは合併であった。Hollins・Brothers社（Hollins, Brothers.and Co.）とホロックス・ミラー社はそれぞれの工場を共有し，Hollins・Brothers社がホロックス・ミラー社に吸収される形で合併した。Hollins・Brothers社の元社長であるFrank Hollins, Bt.卿は新会社で業務を続けることとした。この合併でロンドンやグラスゴーの倉庫卸会社を通さず直接消費者に販売することができるようになった。1887年にはボルトンとマンチェスターで事業を行っていたCrewdson・Crosses社（Crewdson, Crosses,and Co.）との合併を行った。Crewdson・Crosses社の社長であったJ.K. Cross氏は時々ではあるがボルトンの政治メンバーであり，またインド帝国の事務次官も務めていた。これを機に社名をHorrockses・Crewdson株式会社に変更した。この合併によって本国と植民地における取引の増大に対応できるようになった。今なお取引は拡大し，巨大工場の建設は進んでいる。

工場と取引

Horrockses・Crewdson株式会社では6,500人を雇用し330,000の紡錘を所有している。年間1,500,000反を生産しており，一反は40ヤードである。8,000の織機から34,000マイルもしくは地球の直径の4倍以上の長さの布を生産している。従業員には十分な給与が支払われており，他の工場よりは従業員と会社間のトラブルも少ない。生産技術の点においては，この会社では，最新の発明，最新の方式，より一層の改良といったことにはいつも目を光らせ関心を持っている。ジョン・ホロックスがかの有名なカートライト博士の発明に疑心暗鬼であったように，詩人や牧師のような素人の発明家の発明品では粗悪な織物しか作ることができない。そこでジョンはいままで見たこともないような画期的ですばらしい発明品を心待ちにしていた。そしてついにジョン・ホロックスにより力織機が導入された。人類がもたらしたすばらしい3つの発明である，力織機，アークライト紡績機，クロンプトンのミュール紡績機は，文明を高い水準にまで上昇させることに成功した。そして商業の基礎を大きく変革したのであった。洗練された発明品はとても革命的である。そし

てそういったものは，より一層の発明，発見，革新，そして希望をもたらす。文明の向上をもたらさない発明品は，発明の努力を台無しにしてしまい，絶望を生み出し，そして後退をもたらす。まさにフランス革命のごとく，力織機のように文明の向上をもたらす発明品となるまで試行錯誤をくりかえす。

力織機を用いての生産をおこなうことにより魔法のようなすばらしい結果がもたらされたが，Horrockses・Crewdson 株式会社の拡大していく資産と力によりその生産はますます拡大している。

1760 年時点での英国全体の生産量は 43,000 マイルであったが，1913 年現在，力織機などの発明品を用いて生産を行う企業においてはその 4 倍もの生産を行っている。クロンプトンのミュール紡績機を用いた生産の増加により，原材料の輸入額が 1787 年時点において 18,000,000 ポンドであったものが，その 4 年後の 1791 年には 31,000,000 ポンドに拡大した。アメリカの関係者はこの事実にとても驚きこの産業において大いなる可能性を感じている。今日，アメリカからリヴァプールに 3,372,000 箱のコットンおよびコットン関連の品が運び込まれている。ランカシャー州は 1,900,000,000 ポンドを消費しているのである。このようなすばらしい現実をもたらしたように，人間の想像力は従来の世界を打ちこわし，新たなチャンスを作っている。

何もないところから発明を生み出すことができる天才は，発明への欲求と機械への探求心を持ちあわせ，それらを満足させることができる頭脳をもっている（心と頭脳の親和である）。それだけでなくミュールと織機に詳しい。この親和性とは一体何か？風は煙突から小さな小屋のなかに入ってくる。窓ガラスに雨が降り注ぐ。自然の原理として，ろうそくの炎が風にゆれたり，勢いよく火が燃えたり，砂が床にこぼれる。（中略）

自然の原理により風が激しく窓に吹き付けるように，自然は天才に発明のヒントを与え，そして新しい発明が生まれていく。春の英国は，大地には緑が生い茂り，日の光により花々は咲き誇る。樹齢の長い木々は長く大きな影をつくり，水は勢いよく湧き出す。発明家は，理髪師や詩人と同様に，考えごとをしながら牧草地をさまよい歩き，結果答えを見つけ出しす。自然の原理に近づき世界を変え文明を向上させる発想を得るのである。この発想を用いて具現化した結果，Horrockses・Crewdson 株式会社が所有するプレストンの Yard Mills において 1,500 の織機により生産が行われることとなった。（中略）突然発明の前兆が生まれ，私たちはその発明に結果驚かされる。夢や幻影のようである。そしてこの夢は秩序だった調和である。水が湧き出でたり沸騰する様は，自然の声に忠実であり音楽のようである。Horrockses・Crewdson 株式会社が所有するプレストンの Yard Mills において杼が織機にあたる音は，避けることのできない勝利に対する従順さを奏でた音楽のようである。発想を生み出した魂に対し，人々は畏れ敬うのである。発明家は常に不可能と戦い，そして克服する。Horrockses・Crewdson 株式会社では，エジプトおよびアメリカから週に 1,000 箱もしくは 500,000 ポンドの綿が入ってくる。

素晴らしいことに，キャリコ，長尺の布，それ以外の上質な繊維製品は，正確で魅力的な Beauty が所有する不思議な織機を用いて，巨大な工場で生産されている。しかし，私たちは知っている。（中略）鉄製の重たい刃は，毎分 800 で動き，綿の塊をうち砕く。強い風により砂，葉っぱなどは取り除かれる。

（中略）

誠実さはジョン・ホロックスの性格そのものであるように，ジョン・ホロックスの活躍した時代，立派なビジネスマンとは徳の高き人物であった。そのため，彼に注文が殺到したのである。結果的に本国での取引を成長させるに至り，経済状況の変化などの影響を受けることはなかった。誠実な性格と製造業に対する真摯な姿勢は，伝統を大切にし，製造業での名声を獲得するに至った。製造業に対する彼の理想は，偉大なる綿製品の紡織一貫工業である Horrockses・Crewdson 株式会社の経営という今現在の繁栄を築き上げたのである。

（以上全文）

この記述は，Horrockses・Crewdson 株式会社についての「広告 advertisement」である。この広告は，タイムズ紙の2面にわたり大きく掲載された。文章に加え，ジョン・ホロックスの肖像画やプレストンにある工場およびその内部に設置してある力織機の絵も載っている。

この「広告」からは，多くのことが読み取れる。まず，ジョン・ホロックスによってプレストンの繊維業が花開いたということである(30)。先に述べたように，プレストンには古くから織物業の伝統があった。そのなかにおいて，ジョン・ホロックスは他の地域からプレストンに移り住み，一から繊維業の拡大に貢献したことがわかる。繊維業を拡大させていくにあたり，資本家である彼は政治と深く結びついていた。プレストンの下院議員になり，当時の首相であったウィリアム・ピット（小ピット）にまで認知されていたのである。そして，ホロックス社は合併を繰りかえすなかで，インド帝国の事務次官とも関わりをもつこととなった。

ジョン・ホロックスは，プレストンの自社の工場において，機械を用いた生産を導入していた。その上，導入のみだけでなく，機械の発明に対しても積極的に後押ししたことがタイムズ紙のこの文面からうかがえよう。そして，彼は政治家になることによって，綿業における機械を用いた生産の他の地域への導入を推進し，首相であるピットに提言を試みたのであった。つまり，ジョン・ホロックスのような資本家により産業の発展が押し進められた地域では，工業化が進展しており，それ以外の地域では進展が緩慢であったということがうかがえる。そして，機械の導入の速度が緩慢であった地域は，18世紀後半においてもなお中世のような社会が存続していたということも同時に読み取れる。すなわち，産業革命には，地域を支える資本家が存在し，その資本家が最新の経営様式や生産様式を採用することによって，その地域の産業のさらなる拡大をもたらしたのであった。そして，その資本家は，イギリスという国の政治に関わることで(31)，自らが展開する事業を通じ

(30) D. Hunt, *A history of Preston*, Lancashire: Carnegie Publishing Ltd, 1992, 169-175 .: M. Burscough, *The Horrockses: Cotton Kings of Preston,* Lancashire: Carnegie Publishing Ltd, 2004, 3-44.: Hunt, *The Wharncliff Companion to Preston*, 2005, 71. からも確認される。

(31) Hunt, *A history of Preston,* 1992, 169-170.: Burscough, *The Horrockses,* 2004, 21-33.: Hunt, *The Wharncliff Companion to Preston*, 2005. からも確認される。

て地域の産業の発展を優位に進め，結果その地域を経済的に潤していったと考えられる。

機械を用いた生産は，イギリスの綿業に多大なる生産性の向上をもたらした。原材料の輸入額は，たったの4年間で約1.7倍にも拡大した。機械による生産速度の向上である。その結果，生産量は約150年の間に約4倍にも増加した。この生産量の飛躍的な増加は，周知のとおり，当時のパクス・ブリタニカを築き上げた大英帝国の経済を支えたのであった。

このような資本家の活躍は，その地域に「労働力の組織化」をもたらしたことも，タイムズ紙の記述から読み解くことができる。プレストンにホロックスの工場が建設される以前は，紡績工や手織工は各自の自宅もしくは小さい共同の作業場（マニュファクチュア）において，手作業で商品を作っていた(32)。問屋制により運営されていたプレストンの繊維業は，「工場」という一か所に労働者を集め，仕事を効率よく割り振り，一定の品質の商品を計画通り生産していく仕組みへと変化していく。この仕組みの下では，経営者は生産したい商品の種類やその量によって「どれだけの労働者を雇い入れる必要があるのか？」「そしてどこにどれだけの労働者を配置する必要があるのか？」といった「工場」での生産を効率よく行うための管理が必要となる。これを行う「組織」が「会社」という団体であろう。18世紀後半には，資本家が労働者を雇用し，「会社」組織のなかに組み込んでいった。古くから繊維業が盛んであったプレストンには，18世紀にはいっても多くの紡績工や手織工たちがいたが，18世紀前半には問屋制の下で個々に存在していた彼らを，18世紀後半以降ジョン・ホロックスという資本家が，ホロックス社という名の新しい「会社」組織のなかに組み込んでいったのである。このホロックス社という「組織」が経営する「工場」では「機械」が用いられた。さらに「機械」に加え，商品を異にすることで生産に必要となった「手作業での機織り」を担当する「手織工」たちも「工場」内において「組織」の一員として活躍したのであった。その結果，ホロックス社というこの「組織」は，その後，20世紀に向かうにあたり飛躍的に拡大し，パートナーショップという企業形態から株式会社へと変貌し，イギリスと植民地の双方の取引を担うまでに成長したのであろう。

つまり，「ホロックス」という資本家は，プレストンという都市の労働力を，綿業を通じて組織化していった。すなわちプレストンという都市の人々を，経済を通じて，組織化していったのである。これがランカシャー州プレストンにおける産業革命ではないだろうか。

おわりに

以上，ランカシャー州プレストンと資本家であったホロックス家とのつながりをみてきた。ホロックス家は，産業革命期を通じて，単に生産量を増加させるための仕組みを形成したのではなかった。ジョン・ホロックスが作り上げた政治との関わり，そして会社が合併を繰り返すなかでより深まっていく政治とのつながりは，一企業の経営者という役割を越えて，結果プレストンという地域の産業の振興のための大いなる力となった(33)。ホロックス家とプレストンとの経済的・政治的なつながりは，今なおプレストンにおいて至る所

(32) 中川『イギリス経営史』1986，14．において，産業革命期以前のランカシャー綿業は，独立織布工の家内作業場において，問屋制資本により発展したことが述べられている。さらにプレストンにおいて手織工が問屋制下で労働をしていたことはHunt, A *history of Preston, Lancashire*, 1992, 169-170. より確認される。

に見受けられる。例えば，とあるカフェ[34]ではジョン・ホロックスを「綿王 cotton king」と称え彼の肖像画を飾っている。

このジョン・ホロックスをはじめとするホロックス家の人々によって，イギリスを代表する綿業の盛んな都市として成長を遂げたプレストンの経済は，18世紀後半からのイギリス産業革命およびそれ以降のイギリス帝国の形成という，世界に向けて躍進していくイギリスの経済の動きのなかで，その重要性をますます拡大させていった。イギリスがつくっていったこの世界的なビジネスの構造のなかで，ホロックス社は合併という手法により，インド帝国の事務次官といった海外と政治的なつながりがある人物との関係を深めていったのであった。

先に述べたとおり，産業革命期の経済成長は「緩やかであった」と理解されている。人口変動・貿易・技術革新・教育などさまざまな角度から考察・分析されている今日の「イギリス産業革命研究」であるが，経済成長のみを見る限りは，残念ながら「革命」的であるとは言い難い。では一体，何が，どういった点が「革命」であったと言えるのであろうか？

パット・ハドソンは，その著書『産業革命』のなかで，経済に起因する社会の変革こそが「革命」的であると述べている[35]。生産手段が変化し，人々が会社組織に属し，雇用形態が様変わりし，労働の対価として賃金が支払われる，などといった個々人の「仕事」に対する大きな変化は，結果「経済組織」を大きく変化させた。つまり，産業革命以前の経済のしくみがつくりあげた「仕事の在り方」「働き方」「人々の暮らし」が大きく様変わりし，社会が劇的に変化したのである。

産業革命期のプレストンの人の多くは綿業に関わり，そしてホロックス家によってつくられた「会社」に人々が所属したと考えられている。その仕事は「工場」において機械とともに働く場合もあれば，一方で，先に述べたとおり，昔ながらの手織を用いて，機械が生産するものとは異なる商品を生産するという場合も存在した。つまり，「工場」内において単に最新の機械が導入され大量生産が進行したのではなく，古くからの手法による生産も必要とされ，それを継続させながら多様な商品を幅広くうみだしていったと考えられる。この多様な種類の「仕事」が複合しあったことが，社会を変化させながらも経済成長は緩やかとなった一因ではないかと思われる。プレストンという都市は，古くから地元に根付いた繊維業の伝統を受け継ぎながらも産業革命期には綿業を都市の主な産業とし，ホロックス家という資本家の下，長い年月をかけて，その時代の経済状況・経済的変化に対応できるよう，都市内部の労働を組織化もしくは再編していったのではないだろうか。

---

(33) 1980年代にはいり，産業革命に対する捉え方は，大きく変化した。例えば1980年以前の研究においては，「国」を1つの単位としそこにおける経済の変化を産業革命として分析してきた。そのためイギリスという国全体が産業革命を経験したと捉えられてきた。しかし，その後，シドニー・ポラードの研究に代表されるように、地域単位でおきたと考えられるようになってきた。この地域単位で産業革命を捉える視点を用いて，この「広告」の記述を読み解くと，プレストンという地域に対し，ホロックス家という資本家が果たした経済的及び政治的な役割が見て取れる。S. Pollard, *Peaceful Conquest: industrialization of Europe, 1760-1970*, Oxford: Oxford University Press, 1981.

(34) Starbucks uk が経営する Preston Fishergate 店

(35) Hudson, *The Industrial Revolution*, 1992.: ハドソン『産業革命』，1999.

この組織化・再編の様子を，今後，ホロックス社，ホロックス・ミラー社およびHorrockses・Crewdson株式会社等に関する資料の発掘を行い，それを分析することで詳しく考察していきたいと考えている。ホロックス家がプレストンの綿業に果たした経済的・政治的な役割をより具体的により明確にすることで，資本家が産業革命に与えた影響を「都市単位」「会社単位」で明らかにしていきたいと思っている。そして，ハドソンの述べる産業革命における「経済組織」の変化を，プレストンを例としてより具体的に示し，より明瞭に理解していきたい。そうすることで，「同一『工場』内において『機械』による生産と『手織』による生産という2つの生産形態が，生産する製品を異にして混在する」という仕組みを資本家ホロックスが作り上げた理由を明らかにする糸口にしていきたいと考えている。

（2019.1.20受稿，2019.3.7受理）

〔抄　録〕

本稿では，「タイムズ Times」記載の「広告 advertisement」の分析を通じて，産業革命期イギリスのランカシャー州プレストンという都市と，その地域の資本家であった「ホロックス家」とのつながりに関する考察をおこなった。プレストンは，古くから織物業の伝統が根強い地域であり，手作業で織物を織る「手織工」と呼ばれる人々が活躍していた。産業革命期には，手作業に加え機械を用いて綿製品を生産するようになり，プレストンの工業化は拡大していく。

そこには「ホロックス家」の果たした役割が大きかった。単に生産量を増加させるための仕組みを形成したわけではなく，地域および国の政治とのつながりを構築し，経済状況・経済的変化に対応できるよう，都市内部の労働を「会社」という組織に組み込んでいったのである。

そして「会社」は合併を繰り返すことでより大きな「組織」となっていき，より強固な政治的つながりを構築していった。この政治との強いつながりはプレストンという地域の産業の振興のための大いなる力となった。

この結果，プレストンという地域は，その後のイギリス帝国の繁栄のなかで，国内外において大いに活躍することとなったのである。